

84. 公開される「朝鮮雅楽」:「朝鮮雅楽」をめぐる日本人ならびに朝鮮人知識人の言説分析を中心に

北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院 学術研究員 武藤 優

概要

本研究は、既存の研究において植民地期朝鮮における宮廷の祭祀・宴礼楽の「伝統」継承機関（植民地期特有の単一的事象）として位置づけられてきた李王職雅楽部の活動を、同時代の宮内省楽部、さらには満洲の雅楽に関する活動の事例との比較を通して、日本帝国史の枠組みから論じ直すものである。

とくに、日本人及び朝鮮人知識人や朝鮮・日本（内地）の報道に焦点を当て、植民地期における「朝鮮雅楽」の演奏実態並びに言説の形成過程やそれぞれの差異について解明を目指した。さらには、植民地下朝鮮において、「朝鮮雅楽」が朝鮮芸術（音楽・舞踊）として担った役割や位置づけを確認すべく、同時期の日本（内地）におけるエンターテインメント業界と朝鮮芸術（宮廷音楽・郷土舞踊・巫俗）の関係に着目した。主に、1920～45年にかけての朝鮮総督府発行誌・朝鮮及び日本（内地）発行の新聞や日本国内における演芸・娯楽雑誌の分析をとおして、「朝鮮雅楽」をはじめとする植民地期「朝鮮芸術」をめぐる人的移動や興行界の実態について明らかにした。また、宮廷の芸術のみならず、1930年代の朝鮮民謡の収集や調査の実態についても同時並行的に調査を実施した。今後は、引き続き「朝鮮雅楽」をめぐる「学知」の形成過程を、近代メディアの果たした役割を中心に解明していくことを目指す。

貴財団の助成は、主に関係資料の収集や研究発表への参加のための渡航費として使用させていただいた。助成期間中には、専門外の研究者に向けて研究発表する機会にめぐまれ、より多角的な視野から歴史を見つめる態度を養うことが可能となった。これもひとえに、三菱財団による基礎的研究への厚いご支援によるものであり、この場を借りて御礼申し上げる。

背景および目的

かつて「朝鮮雅楽」は、宮中もしくは祭祀に関連する施設において限られた者のみがその演奏を耳にすることができた。しかし、1920年代以降、李王職雅楽部は宮廷のみならず、（一部、限定的ではあるものの）朝鮮さらには日本（内地）の一般観客の前で公開演奏を各所で実施し始める。なかでも、日本人及び朝鮮人知識人や言論人を中心に、雅楽部員による「朝鮮雅楽」演奏を目前で観賞する機会を得る者も現れ始める。本研究では主に日本人及び朝鮮人知識人（研究者・言論人）による「朝鮮雅楽」をめぐる論説、報道に焦点を当て、植民地期における「朝鮮雅楽」の演奏実態並びに言説の形成過程やそれぞれの差異について解明する。とくに、「朝鮮雅楽」と朝鮮総督府（学務局）や日本人研究者との関係性を注視し、帝国日本における「雅楽」の「保存」と「振興」さらには新たな「伝統」の創出の実態について解明することを目的とする。

方法

主に植民地期朝鮮の出版物（雑誌『朝鮮思想通信』等）、朝鮮人知識人や元雅楽部員による戦後の回顧録、新聞（『京城日報』『毎日申報』『東亜日報』『朝日新聞外地版』）といった日本（内地）及び朝鮮における出版媒体

を中心に、「朝鮮雅楽」をめぐる日本人知識人や言論人、報道関係者による言説の収集・分析をおこなった。これら、「朝鮮雅楽」をめぐる「学知」の形成過程を、近代メディアの果たした役割を中心に解明していくことを目指した。

また、日本国内における演芸・娯楽雑誌の分析をとおして、「朝鮮雅楽」をはじめとする植民地期「朝鮮芸術」をめぐる人的移動や興行界の実態について明らかにした。

結果および考察

「朝鮮雅楽」をめぐる歴史を解明していくうえで重要な点は、単にその研究対象を「朝鮮雅楽」に絞るのではなく、同時期の対極的な存在と位置付けられてきた民俗芸術や大衆芸術との比較を実施していくことである。なかでも、1930年代後半の戦時下日本・朝鮮におけるそれら「朝鮮芸術」（音楽・舞踊）をめぐる人的移動や言説を考察した結果、「朝鮮芸術」は「帝国日本」における「郷土芸術（舞踊・音楽）」としての価値を高く見出されていたことが明らかとなった。既存の研究では、植民地朝鮮におけるいわゆる「伝統芸術」が植民地日本による一方的な圧力により、苦難・受難の歴史を負ったとされている。

しかし、実際には日本の帝国版図の拡大とともに、「朝鮮芸術」はより一般大衆へと公開され、ついにはショービジネス界を牽引する斬新なテーマとして頻繁に採用されることとなった。一方で、戦時下日本における「朝鮮芸術」をめぐる積極的な興行化へのアプローチは、あくまでも日本を指導者とした郷土芸術としての「朝鮮芸術」の意味付けが実施されていたことを示すものでもある。

今後の展望と課題

本助成金受給中には、国内外への研究発表ならびに研究調査を実施した。さらには、研究や専門の領域を専門外の人や研究者以外の方々に積極的に発信する場を設けることに力を注いだ。今後は、主に日本国内外における朝鮮（韓国）音楽・舞踊研究者による研究会を組織し、さらなる研究の深化や研究者内外への情報・研究結果の発信につとめる。

今後の課題は、李王職雅楽部による活動、なかでも雅楽部をめぐる執筆・出版筆活動に焦点を当て、「朝鮮雅楽」を「振興」の観点から論じ直すことを目指す。さらには、雅楽部に舞踊を教授した民間の舞踊家による取り組みやその公演活動に着目することにより、「朝鮮雅楽」がいかにして大衆に公開されていたかについて、その詳細なプロセスを解明することを目指す。それと同時に、朝鮮（1910～45）における近代的劇場の建設やメディア（出版・放送）の発展状況をより多角的な視野から分析し、「朝鮮雅楽」をはじめとする「帝国日本」における朝鮮（固有）の芸術と植民地支配との関係性を一般への「公開」の視点から明らかにしていく。

（完）

口頭発表

- 1) 「戦時下日本の興行界にみる朝鮮エンタメの源流」（北海道韓国学研究会 2026 年第 2 回 2026 年 3 月 14 日）【招待あり】
- 2) 「帝国日本における「朝鮮」ステージ・ショウの世界：日本劇場公演を中心に」（日韓外交正常化 60 周年記念 日韓研究者国際学術大会 2025 年 11 月 13 日）【招待あり】
- 3) 「〈朝鮮〉エンタメの世界－戦前・戦中編」（さっぽろ自由学園遊 2025 年度講座「コリアン・カルチャーの過去と現在」 2025 年 5 月 30 日）【企画・運営・講演・司会担当】
- 4) 「帝国に鳴り響いたアリランー植民地期朝鮮における朝鮮民謡収集活動を中心に」（国際高麗学会「アリラン叢書」ワークショップ、2024 年 2 月 18 日）【招待あり】